

興味を仕事に生かせるこの日本語の世界で生きていきたい

譚 パイ

tanbeifei@yahoo.co.jp

1. はじめに (動機文)
2. Lさんとの対話
 - 2 - 1 私にとって言葉とは
 - 2 - 2 私にとって文化とは
 - 2 - 3 私にとって日本語を教えることは
3. 結論
4. おわりに

1. 動機文

私が日本語教育に携わりたい理由

私は三人家族で父は高等学校の教師を、母は中学校の教師をしていた。私が教師になろうとした切っ掛けは最初は教師だった父と母の影響だった。今はたくさんの学生たちに接して、いろいろなことを伝えたいからだ。

大学から日本語を勉強し始めた。二年生の時から、週末に中国のある小学校で日本語を教えていたのが、私の日本語教育の原点だった。大学を卒業してから、YAMAHA との合併会社で通訳の仕事に就いた。学ぶことも多く、充実した日々を送ったが、いわゆる「媒介役」ではなく、言葉を教える仕事に携わりたいという気持ちが強くなって、師範大学大学院で3年間の集中的な教育を受けて、日本語教育の世界に戻って来た。私の場合は、日本語教育一直線ではなく、「回り道」もしたが、年若く多感な学生の将来を決める重要な時期に立ちあう現場では、「回り道」で得た様々な経験が役に立っている。困ったこともよくあったが、日本語が全くわからない状態で入学した学生が、四年間の日本語習得を通じて成長し、ついに巣立っていく時の充実感と満足感は、何物にも替えがたいものがあった。研究面では、大学院で啓発を受けた「言語と文化の結び付き」方面に興味がある。また学生向けの、より効果的な指導法を開発していきたいと思っている。教育が研究かではなく、教育現場で湧いた疑問を研究によって明らかにし、その結果をまた現場に還元するという方法で、教育も研究もバランスよく行っていけたらと思う。

日本語教育は私のライフワークであり、そのライフワークに出会えたことを感謝しながら、研究や仕事を続けたいと思っている。そして、微力ながらもぜひ中日教育文化の交流と友誼を促進させるために力を注ぎたいと思っている。

2. Lさんとの対話

日時 2008年11月18日(火) PM.19:30-PM.22:45

2008年11月29日(土) PM.20:00-PM.22:50

場所 祖師谷国際交流会館の台所と一階のラウンジにて

11月の始めごろ、同じく祖師谷国際交流会館に住んでいる早稲田大学工学部生で会館のチューター

をしている A さんと 1 時間半ぐらい「私が日本語教育に携わりたい理由」について話をしていた。「もう一度深くお話をしましょう」と約束したにもかかわらずその後お互いの都合でなかなか会えないでいた。ちょうど悩んでどうしたらよいのかと迷っていたところ、いつもラウンジで英語で幾人かの友達と楽しそうに歓談をしている L さんが目に入った。彼女はどうかと思い付いたのだった。

L さんは中国の高校で英語を教えている先生で三十代後半の女性である。かなり明るくて朗らかな性格の持ち主のようだ。今度奨学金を得て、一年半の教育研修に日本へ来ている。現在、東京外国語大学で日本語の勉強をしている。教育現場にいたという環境が同じなので、通じ易い所があると思った。今まではネイティブスピーカーと話せば、違った考え方がヒントになるという理由で談話相手を選んでいたのであった。私のこの考え方を始めしたのは彼女に会ってから以来のことだった。宿題への協力で「私が日本語教育に携わりたい理由」についてじっくり、ゆっくりとお話をしてほしいと頼んでみた。L さんは躊躇することなく「ok, you are welcome」と明るく返事してくれた(彼女は英語が大好きなようで、いつでも英語を使いたいとの雰囲気がかんぶん周りへと発散している)。そして、火曜日に夕食を作りながらお話をしようと約束した。

2-1 私にとって言葉とは

改めて動機文を中国語に書き直して事前に L さんに渡して読んでもらった。その上に、対話にある方向性を付けて進ませるために問題発見解決学習の趣旨と先生の学問理念と教室活動や進展状況などについて説明を加えた。

L: 日本語の勉強が興味で始まったの。(半信半疑で)

私: 確かにその理由もあったが、それがすべてだったというわけでもない。知らない世界のことを知りたいというのと、大学出たら、就職しやすそうな感じ(他人から聞いた話を簡単に鵜呑みしてしまった)。

L: そうよね。あの頃は言語関係の仕事がはやりつつあった時代だった。将来のことを考えていたら、やっぱり。じゃ、ワークシートに書いたように、過去の興味は。

私: ええーと、いろいろあったんだね。

(過去と現在の興味について話をしていた)

L: 今、聞いた話では、過去と現在の興味がぜんぜん違っていたんじゃないの。何で長く続かなかったの。

私: (いきなり突っ込んできたので、暫くは答えに困っていた。) 多分、自分の本当の興味ではなかったのかね。始まったのも、様々なわけがあつてさ。武術というと、その服装をしていたら、格好いいなと思って始めたのだ。書道は部活だから、ほかの活動より簡単にできそうだし。

L: で、何で日本語だけは今でもやってきてるの。

私: なんか見方が変わりそうだったし、生きていくこの世界も広がっていきそう。

L: その点では、私も同じだからね。いつもと違った窓を開けてくれそう。この新しい窓から今までと違った風景が目に入ってきている感じ。

私: 私、やはり、新しいものを知りたい、了解したいこの性格からだと思う。

L: 言葉の勉強というのは、そういう所が優れているよね。

中国では、興味が職業に生かせる事を羨ましく思っている人が少なくないでしょ。ご存知のように、人口の多い国では、進学や就職の競争が激しいからだ。今、興味で仕事をしようと思う若い世代が多くなると思うんだけど、Lさんと私の時代では、なかなかそうは行かないようだった。将来の仕事を考えた上で専攻をきちんと決めておかないと。でも、たかが高校生くらいの段階で将来のことを決めるのはかなりむずかしいようだ。だから、人の一般論に流されやすい。あの時代に、よい職業の上位三番の順位は、コンピュータ関係・外資企業(通訳、ガイドなど)・法律だった。今、日本の若い人に「夢は何」と聞いたら、「ケーキ屋さんになりたい」、「大工をやりたい」、「大学院に入ったのは自己満足です」といった答えが返ってくる。実に羨ましくてたまらない。

もし、現実のことをぜんぜん考えもせずに自分の興味を仕事に生かそうとしたら、今頃私はどこで何をしているだろう。時々、気分転換に想像してみたりする。不思議なことに結局日本語ほど長持ちする興味がなかったという結論に至った。最初は仕事に生かせるほどの確かな考えではなかったが接しているうちに単なる興味から一生離れたくないという感情にまで発展していった。ひょっとしたら、日本語を通して、新しく変わった世界を見るチャンスに恵まれているところに心を動かされた。今好きになって最初ちょっとぼんやりとした興味を将来の可能性の一つとして日本語を教える仕事に生かせると思うことだけでわくわくして感謝の気持ちでいっぱいだ。

2 - 2 . 私にとって文化とは

私: ラウンジで会ったたびに喋っている相手がまた違うっていう感じなんだけど。

L: そうよ。いろいろな国の人としゃべったら、様々なことが聞けるからさ。

私: ていうと、違った環境で育ったネイティブスピーカーとコミュニケーションをしているうちに、その言語と文化などに身が染まるんだよね。いろいろな英語系の人と知り合いになって、なにか感じたこととかある。

L: で、この間、雑誌見てたら、ドイツ人と中国人を様々な面で比較して漫画に描いた。面白いね。例えば、中国社会の人間関係はかなり噛み合っていて探せば誰にでも、結局繋がりがあったりするのに対して、ドイツの場合は、棒とか三角の関係でかなり簡単に見える。ドイツのテーブルではお箸が相当なブームとなって、中国ではフォークとナイフをファッションに思うとか。

私: そういった文化比較の例がたくさんあるね。他に、イギリス人、ロシア人、日本人、ドイツ人と一緒に船に乗って事故に会ったら、それぞれどうするかとの話とか。

L: それは合っていると思うね。どう思う。

私: 傾向から言えば、あっている所があるけど。でも、xx人はどうであろうという言い方は変だと思う。会館に住んでから以来、こんな言い方に囲まれてばかりいる感じ、ちょっとうんざりしてきた。いきなりアメリカ人ば何だとか、黒人は何したとか、中国人は何々とかといった発想自身は言い過ぎと思わない。

L: そう言われると、こういう言い方も私も結構使っていたね。文化の授業でそうやってきたよ。アメリカ人はとか、イギリス人との違いとかさ。

私：それは、口滑って言い出し物じゃないと思う。言葉遣いからあなたの密かに考えていたことが伝わってくると思う。言い換えれば、あなたの潜在意識を表面に顕わすと思う。

「××人はどうであろう」という大まかな言い方に賛成しかねる。文化とは抽象的で広い範囲でのものではなく、そして、手の届くことができないようなものではない。それは、日常生活の中で、一人ひとりの個人が他の人とコミュニケーションの姿勢をとってこそ現れてくるものであると思う。

そして、「世の中にまったく同じ葉っぱがどこにもない」といったように、一概的でみんなに認められるような文化はない。個人にとって、感じ取った文化は唯一でコピーして再生できないものでもある。

言葉と文化の関係を考えてみると、言葉は文化を理解するための道具である。文化はよく言葉を通して反映される。言葉と文化は一体化してお互いに離れない存在になっていると見てもいいと思う。

面白いことに、同じことに対して、違った国の人をもっと寛容的な態度を取る傾向があると察しました。それはなぜでしょうと自分にも問いかけ直した。考えた結果、先入観がなく相手の文化を受け入れられるのではないかという結論に至った。

2 - 3 私にとって日本語を教えることとは

L： そういえば、大学出たら、日系合弁会社に通訳として勤務したの。どうだった。

私： 本当に充実して楽しかったんだ。分からないことばかりだったので、スポンジのように吸収してきた。

L： いい体験だったよね。それに、あのごろにしては、合弁会社だと給料がずっと高いほうだったわ。

私： そうだけど。でも、会社ではある程度の蓄積ができたなら、後は新しいものが入りにくくなったし、私はやはり新しいものがどんどん入るような環境が好きだ(この話を口から出し始め、本性だなと気付いた。) あともう一つは、なんだか自分には考える力がなくなってしまったと気付き始めた。

L： そうか。言われた通りに言葉を切り替える作業だけだったでしょ。

私： もちろん、表情とか口ぶりとか工夫したけど。再生のような作業だった。ぶっつけ本番の時、どう言えば相手に伝わるのかパニックの場合があった。

L： え、それ何？

私： いつも、人の話を違った言葉に訳す仕事なので、自分は段々考えなくなったし、考えることも面倒に思うようになった。

L： 考えることか。前の紹介の中で、細川先生の総合活動型日本語教育を紹介したよね。

私： そうそう。考えることを自分の言葉にして人に伝えて分かってもらうといった一連の活動なの。

L： で、どう思うの。

私： 本当に学生を主体に考えているお素晴らしい教育理念だと思う。教師の役割は学生の積極性を引き出させることにあると。

L: それに同感。

私: それに、言葉と文化を全て学生の中にある。日本語の正しさにそれほど拘らずに学生の中にある言葉を自分の言葉にして出させると先生は主張しているようだ。

L: それはかなり新鮮だね。

中国の古典教育「論語」の中でこんな言葉が書かれている。「人に魚をあげるより人に魚の取り方を教えよう(“受人以魚、莫如授人以漁”)」。つまり、学生に物事の考え方を築き上げさせることの大切さを教えてくれた。細川先生がこのような教育理念を実践に移して実施したお陰で、考えることの大切さをこの身で実感している。また、考えることを生活習慣に結びつけるようになり始めた。

孔子が曰く「学習だけで考えせずにすれば迷う。考えてばかりいて学習しないと怠けたままである。(学而不思則罔、思而不学則怠)」。学習と思考の循環双生の繋がりを強調している。いかに学生に自己思考をさせるかは確かに教師の大きな役割だと思っている。

3. 結論

授業の一連の活動を通して、今までにあまり真剣に考えたことのないことを深く考えさせられた。久しぶりにこんなに辛く真剣に物事を考えた。今までにこんな問題発見学習の体験も初めだった。

私が日本語教育に携わりたい理由は何であったのかということを確認してきた。なんだかすっきりしてきた。最初にぼんやりとこの世界に入ってきた私だったが、日本語と接して以来、日本と切っても離れない存在になった。日本語の勉強は世界を知るもう一つの窓を開けてくれたようだ。言葉が分かるから、コミュニケーションすることによってこの言葉を使っている人々の文化や考え方も自然に身に染みってくる。

いつも新しい物事に興味を持って知りたい、習いたいというのが私の性格なので、日本語のお陰で、いろいろ斬新なことを楽しんできている。そしてこの体験したことをもっと多くの人と分かち合いたい気持ちがある。教師ほど人に影響を与える職業はないと思う。日本語を教えることを通して感じたいろいろなことが伝えられる。また、こうした触れ合いからほかの視点で自分を見直すことができる。

最初の選択は自分に合うし、間違いなくという結論にほっとした。日本語のことで、教師になることでも。この問題はこれからずっと日本語の世界で生きていきたい私にとって実に意義深いことである。

そして、今までに自分の日本語に自信がなく、いつも他人の言葉を搜して、本に書いたものを真似し言う自分だったが、今、自分らしい言葉を使って段々言えるようになり始めた。

振替えてみたら、大学で日本語を専攻にしたことは良かったと感じた。そして、現在大学院で勉強する機会を得てラッキーだと思っている。このチャンスを大切にしながら日本語教育の研究を続けたいと心の中で決めた。

4. おわりに

10月から始まった自分の世界を作ろうという「考えるための日本語7&8」は、そろそろ終わりに

近づいた。そもそもは過去と現在の興味を持っている分野と将来に取り組みたいことを繋ぐのを考えることが私の本来の目的だったのだが、書き上げてみると全体的にあまり繋がらなくて説得力を持っていないことに気が付いた。

将来の可能性がたくさんあって生涯の課題として扱うことができても、「『考えるための日本語』という授業がどれほど理解できたのか、日本語教育に対する新しい視点の発見」というもう一つの“狙い”はどうであったか。

これも十分に理解したとはいえない。やはり言語を専攻に選んだ理由の一つはあまり考えることなく、単なる文字的な切り替えだけだと考えたからかもしれない私にとって、この授業から受けた刺激は大きかった。

以下、この授業で感じたことと得たことを補足してこの文章の結びに代えたい。

1、新鮮に感じたところが主に二つある。一つは談話相手を決めてとことんまで話し合うことができた。自分の気持ちや意見を他者に伝えることが求められた。この活動を通して、普段の授業以上にこの技術が身に付いたと私は感じている。人に何かを伝える目的で書いた文章であるから、まず自分が何かに気付かされ、考えさせられることがある。文章を書くという行為は、文章という窓を通して他者と対話すると同時に、自分との対話でもあるからだ。もう一つは相互自己評価という段取りだった。授業の最後には相互評価の段階があり、そこで自分の文章に対する授業を受けるクラスメートの評価が分かる。これは、更に私に様々な考え方を気付かせてくれたとても貴重な場となった。振り返ってみれば、結果主義の枠に嵌め込んだのが、今度の失敗の一つだった。最初から評価がどうなるか、レポートをどう纏めるかのことにこだわりすぎて、結局自分の本心を探れないで済んでしまった。

2、自分をくぐらせようという心や、同じ課題を考えている人が集まっているから、とてもいい刺激を受ける。同時に、教室全体の連帯感や、集団でなし遂げた充実感も参加するメンバーのよりどころになっている。ややこれと異なるが、「触れ合い」、教室内・外の様々な素晴らしい人々に接する楽しみ、他者を理解し共感することの満足感、今まで自分の気付かなかったことに改めて気付いた時の面白さ、自分と共通した意見を持つ人々を見出す喜びがある。

3、「考えるための日本語」では、自分のペースでいろいろ考えていたことは前期には緩やかな雰囲気を感じたが、後期になると、追われる日々が増えてきて、他人の文章を読んだり、評価の言葉遣いを気遣ったりして自分のリズムが狂わされてしまい、あまり自分のことを考える余裕がなくなったというような気さえもした。

4、「考えるための日本語」はグループの実習生やメンバーたちや、対話相手に関わる全ての人々との協働を前提に、学習者が主役となって考えるための実践活動の企画だと理解している。自分の根本から問い直せるところがこの授業の魅力だ。私は授業で味わった体験を元に、この活動を考え続けている。

ここで学び、考え抜いたことが私の知識となり教養となり、毎日の生活の中でそもそも「考えるための日本語とは何か」を考えるようになった。

この授業で得た楽しさ・辛さ・感動・悟りを通じ、熟考し、自ら行動し、発信する。そしてまた考え、感じてみる。楽しさ・辛さで止まってしまっただけでは何も問題は解決しない。この一連のサイクルを自分の中で生むことができるようになったことが自分の成長点だと思う。

デカルトが「我思う故に我あり」と言ったとおり、考えることで自己確認と自分の居場所が見つけられる。これからも、自己を見失うことなく、自分の意見や自分がしたいことを大切にしながら、更に自分のよりどころ・原点を確認し、自分の価値観形成による自分の世界を作ることをテーマとして引き続き考えてゆきたいと思っている。